



Title	造園學的課題の本質に就いて
Author(s)	久保, 貞
Citation	北海道大學農學部邦文紀要, 1(1), 34-41
Issue Date	1951-12-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/11493
Type	bulletin (article)
File Information	1(1)_p34-41.pdf



[Instructions for use](#)

造園學的課題の本質に就いて

久保 貞

(北海道大學農學部園藝學第二教室)

On the essence of problems in landscape design.

TADASHI KUBO

目 次

1. 序
2. 研究の方向
3. 諸學との關係
特に農學, 文學, 美術, 林學, 工學等に就いて
4. 結 言

I 序

我國に於いても、生活文化の向上に伴つて、庭園、公園等生活環境の美化についても人々の注意が向き始め、大學に於て、林學、農學、或は建築學等の夫々の圏内に、各々の觀點から、森林美經學或は造園學が開講されてから、既に數十年を過ぎた。¹⁾ 日本に於ける庭園の築造は、古く、特に室町時代以後になつて僧侶、画家、茶人、花道人等の趣味が最も強く吸收同化表現されたことは、²⁾ 古來からの庭園を一々擧げる迄もなく明らかである。西歐に於いては、画家がカンヴァスを以てする代りに、野や丘や、林や水で、美しい自然的な風景を創造することは、18世紀以後の英吉利に見るまではその例がなく、主として行われた建築式造園も、始めの中は、建築家又は園藝家の知

識と趣味とによつて行われたといふところに、³⁾ 我國に於ける庭園の根本的な特徴が認められる一方、西歐に於ける斯學が、園藝學、建築學等に於いて講じられ、私庭園から公園へ、更に天然公園へと問題が擴張されるに伴つて、森林美學をも含めた廣義の造園學を、林學に於いて講じたことも、⁴⁾ 又、容易にうなづくことが出来る。その殆んどすべてについて、西歐に倣つた我國の斯學の發祥に於いても、⁵⁾ この傾向が、無條件に取り入れられたことは、福羽逸人博士、本多靜六博士、原熙博士、田村剛博士等學會先覺者の主張並びにその業績によつて明かである。

近來漸く一般化しつつある造園と言う語は、單に庭園及び公園の創造を意味し、作庭の意に用いられるのみならず、極めて廣汎の義に用いられている。⁶⁾ ことに於て、上原博士、田村博士等によつて用語の不適當が指摘され、⁷⁾ 丹羽博士は作庭及び庭園なる古來からの用語の使用を主張した。⁸⁾ 丹羽博士の觀點に立てば、風景計畫 Landscape Design に對して、單に狹義の場合に造園 Garden Making なる語を用いることを妥當とする田村博士の用語解釋は、⁹⁾ 多くの難點を有つことを否め

1) 田村 剛：我國に於ける造園學の發祥. 造園研究, 4; 86頁.
2) 田村 剛：造園學概論. 13~14.
3) 針ヶ谷鐘吉：英吉利風景式庭園. 造園研究, 9; 13.
4) 田村 剛：造園學概論. 13.
5) 田村 剛：我國に於ける造園學の發祥. 造園研究, 4; 72~82.

6) 上原 敬二：造園學汎論. 2, 5.
WAUGH, F.A.: Landscape Gardening. 1, 1922.
7) 田村 剛：造園學概論. 16~17.
上原 敬二：造園學汎論. 3~7.
8) 丹羽 鼎三：庭園の本質. 造園雜誌, 11; 21~26.
9) 田村 剛：造園學概論. 16~17.

ない。一方造園學が、庭園に關する學であつたことは、既に過去に於けることとなり、最近斯學の發展分化は生活文化の向上に伴つて著しく、學の範圍が次第に擴張され、造園と言う語のもつ概念には、作庭のみならず、風景計畫をも含めていることの多くなつたことが、注目すべき一般的傾向であることも又事實である。而して特に個人庭園の創造を意味する時に作庭と言ひ、天然公園等に領域の廣まつた時には、造園と言う語をさけて風景計畫と言う語を用いることが多いのであつて、¹⁰⁾このような造園學に於いて、研究されるべき課題及びその方法は、極めて多岐に分れるが、ここにはその一々に就いて論及することはつとめてこれを避け、斯學に於ける最も中心的な課題である美に就いての研究に關して、既に試みられた研究及びその方法を検討しつつ、方法と目的とを明かにすることに努めたい。このような検討を試み報告するにいたつた所以は、ひとり著者の研究そのものの興味に於いてのみならず、これによつて、林學、農學及び建築の専門家が、造園學に對する立場の概念を明かに把握し得ると信ずるからであつた。著者は技術の進歩或は作庭家の傳記的考證に於て庭園を論ずる方法を避け、廣義の造園學の概念の把握の下に、技術に關する諸學の外に、美學、美術史學、建築史學、精神史學及び一般文化史の主張をも參酌して、作品そのものの美の構造に於いて造園美の展開を理論的に把握しようとし、¹¹⁾

その研究をすすめつつあるが、この小論は、その間に於ける序論的考察の一部である。

II 研究の方向

造園學の蘊奥は、現在に於いては、農學科、林學科及び建築學科で教授され、都市計畫に關する一部造園的事項は建築及び土木學科に於いて教授されている。即ちこれによれば、造園學は農學であり、林學であり、工學でさえもある。而して確かに、廣義の造園術の一部は、園藝技術であり、林業技術であり、又同時に工學技術でさえもあるが、それらは何れもその本質ではないことが特に注意されなければならない。元來作庭は、繪画、彫刻及び建築と共に造形藝術と言われ、美學に於いても多くの學者は最も複雑な構成を有するものとして造形藝術の中に分類した。¹²⁾この藝術として、庭園の特殊性によつて、造園學には他の農學、林學、工學(建築を除く)部門には見られない歴史及び設計論が、その最も重要な學として行われている。造園學に於ける科學的研究の方向を大別けると、その美的な面、材料及び生産の面という二方向がある。その美的な面¹³⁾は現在のところ、造園史、風景構造論及び設計論に、材料及び生産の面は、材料、施工、經營、行政等に關する研究に負うている。¹⁴⁾

造園教育が如何になされるべきかに就いては、我國に於いても既に多くの報告が見られるが、¹⁵⁾

10) 造園には二つの用語があり、「庭を作ること」及び「作られた庭」なる意義に用いる。

丹羽鼎三：庭園の本質。造園雜誌，11；25，1948。

11) 造園美の展開を理論的に把握するに最も基本的な要素は何であるかということに就いて未だに強力な主張が見られない。蓋しこのような研究のすまない所以である。最も参考になるのは Riegl, A. の藝術意欲の概念であり、Wölfflin, H. の生活感情或は基礎的情趣の概念である。それらの表現としての作品の構成原理をそれらとの關連に於いてその發生と發展との経過を明らかにすることは、その理論を歴史的に把握するに際して究められるべきことであつて、その辨證法的統一と演繹的推理の上に設計に關する理論が組立てられることが科學的合理性をもつ。

12) 例えばカントは、藝術をその表現方法によつて分けて

Die redende Kunst. Die bildende Kunst, Die Kunst des Spiels der Empfindungen の三つとし、第二の造形藝術の中に、彫塑(彫刻及び建築)、繪畫(繪畫、造園術)を分類した。尤も藝術及び造園という語の定義によつては、造園は明らかに「藝術ならず」という主張をすることも又可能である。

13) 美學的見地から、藝術的という語を避け、特に美的という語を用いた。

14) 西山卯三：建築史ノート、4によれば、建畫の科學的な研究の様々な方向を大別けて、その藝術的な面、生活的な面、生産する面、物質的な面という四つの方向が最も特徴的であると、生活的な面は計畫學に、物質的な面は構造學に、生産する面は施工、經營、行政等の學に、藝術的な面は現在のところ建築史學にうけもたれる。

それは造園技術者がどのような素養を身につけるべきかを意味すると共に、造園學に於ける研究課題の性格についても十分に暗示することが出来る。造園學の最近の進歩に伴つて考慮された最高學府に於ける教育上必要と見られる科目をあげると¹⁵⁾ 造園史、造園計畫理論、構成材料、基本風景構造、風景計畫原論、園藝要素、植物材料、都市及び地方計畫原論、基本建築計畫、基本自在画、製圖、風景計畫、風景構造(中級)、事務演習、私有地植栽計畫、基本建築計畫(中級)、中級自在画、上級造園計畫、風景構造(上級)、公私有地植栽計畫、都市並びに地方計畫原論(中級)、上級自在画等であり、これらの外に他學科のものに建築史、美術史等がある。これらの中には單に造園家としての素養であるに止まり、造園學としての研究の興味のうすいものあることは言を俟たない。更に嚴密に言うならば、材料及び施工に關する研究面は、それが造園學に於ける研究である爲には造園的美或は造園的効用の關聯に於いて試みられすすめられることが必要であつて、然らざる場合即ちそれらの材料及び生産に關する研究が單に斯學に關係深い農學、林學或は工學的な興味に終始する場合には、それが若し造園施工に應用し得るものであつても、建築材料及び建築施工等の建築學に於けると同様の位地を興えるには不十分であると言わねばならない。

かくの如く造園學に於ける研究上の興味は、如何にして美しき風致をもたしめるかというところに要約されるのであつて、材料及び施工の面については、他の學に於ける研究成果を、そのために如何に應用するかということが問題となる場合

が多い。

Ⅰ 諸學との關係

園藝が未だ現在のように進歩していない時期に於いては、それは一つの藝術であつた。¹⁷⁾ 植物學その他の自然科學の進歩に伴つて、園藝には徐々に色々の部門が生じ、¹⁸⁾ 十九世紀から現在にかけて園藝の學としての方法は益々農學的となり或は時には植物學的とさえなつて、その結果方法的に造園學がその必要を主張されるようになった。その主な理由は、未分化の時代に於て、「園藝が一つの藝術であつた」ことに原因している。この「園藝が一つの藝術であつた」觀點に立つて、最も造園學的に園藝術を論じたのは、十八世紀に於ける英吉利の業蠶である。説明及び理解の便宜上、以下簡單にその經過を概観する。

先ずその時代の藝術に現れた時代思潮的傾向を一瞥する必要がある。十七世紀の詩文は、民謡その他に多少の異例はあるけれども、¹⁹⁾ 自然に對しては甚しく無關心であつた。それは又繪画を除く他の藝術についても言えることであつて、建築に例をとれば、十七世紀伊太利建築はバロック(Barock)様式を生み、かのロココ(Rokoko)趣味は、それが佛蘭西に入つて形造られたものであつた。これらの建築は、あらゆる文化面に十八世紀中葉迄著しい影響を興えた。

それらとの調和が考えられて、それらに從屬するものとして設計されたバロック庭園及びロココ庭園に於いては、その建築の裝飾的特徴と相俟つて、そこに要求され、そこに喜ばれた美は「自然的」を避け、専ら「人爲的」に頼つたものであつ

15) 田村 剛：造園學概論。20-21。

森 歡之助：造園教育私見。

内田桂一郎：ハーバート大學に於ける造園教育。造園研究，15。

岡崎 文彬：歐米に於ける高等造園教育。20；40-55。

上原敬二，田村剛，中島卯三郎，戸野琢磨，永見健一諸氏の造園教育私見。庭園及び風光，昭和3年1月。

16) これはハーバート大學に於ける造園學科の必須科目を示したものであり、これらを卒えた後に卒業製作をする。

17) BAILEY, L.H., New Cyc. Amer. Hort. vol III, 755.

18) Annals. Hort. 1891, 125, 130, Bailey New Cyc.

Amer. Hort. vol. III, 755 の引用によれば, Pomology, or the growing of fruits; Olericulture, or vegetable gardening; Floriculture, or the raising of ornamental plants for their individual uses or for their products; Landscape Horticulture, or the growing of the plants for their use in the landscape (or in landscape gardening). に分けられている。

19) HENNIG, R., Die Entwicklung des Natuagesfühl, 1912, S. 52.

て、平坦と直線と相似とが最も好んで用いられ、彫刻や噴水、飾鉢等が効果的に裝飾の役を果たした。庭園に平坦な地面を喜んだこの時代の人々の自然感情は、最も自然的な森地をさけて、²⁰⁾ 風景地の理想をむしろ道路や並木の印象的な沃土においた。²¹⁾ 並木の愛好は、この時代に於ける自然觀照の最も著しい特徴であつて、²²⁾ その記事は諸所にこれを見出すことが出来る。斯くて KAMMER, F. は、その時代の人々の自然觀照は、バロックとロココの庭園の影響を受けていたとした。²³⁾ KAMMER, F. のこの結論を、全くそのままには受けられないとしても、この自然觀照の特徴と、それらの庭園との間に、相互的共通性を見出し得ることは間違いない。

文藝復興期の伊太利繪画は遂に風景美を發見したが、Umbria 風の樹木描寫から DOSSO DOSI, CORREGIO, LIONARDO DA VINCI 等の努力を経て、觀察が細密となつて寫實性を増し、初期に於て宗教画の背景として概念的又は象徴的に樹木を画いたことに比すれば、ここに風景画發達の基礎がかためられた。この十六世紀を経て十七世紀に入り、RUBENS, REMBRANDT, RUISDAEL, LORRAIN, ROSA, POUSSIN 等によつて、風景画は遂に繪画の中の獨立の一部門を占めるに至つた。佛蘭西に於ける GASPARD POUSSIN, CLAUDE LORRAIN 等の大家より稍々遅れて英吉利に於いて風景画が活氣を呈したのは十八世紀に入つてから後である。而して風景画の興味は、人為的な自然から自然そのものを描くことへと變つていつた。この間常に画面構成上重要な自然物として樹木及び森林に對する研究は、伊太利画家以來熱心につづけられた。

大陸に於けるこのような藝術界の風潮の中に

あつて、史上最古の埃及庭園に始まる古來からの庭園はすべて所謂整形式²⁴⁾ に類するものであつた。就中伊太利及び佛蘭西の庭園はその代表的なものであつて、整形式は又建築式、幾何學式、伊太利式、佛蘭西式等と言われていることからその特徴をうかがい知ることが出来る。著者は更に筆を急がねばならぬ。

愈々英吉利の造園界に於ける意義深い論争について考える前に、それに先んじて庭園の専門家の間にはどのような著述があり、どのような主張があつたかについて述べることも又必要であると考える。所謂 Topiary Work が特徴となつているチュードル朝の庭園時代から、園藝農業に關する文獻は散見された。エリザベス女王時代に至ると庭園に關する著書は漸く多くなつた。即ち例えば ANDREW BOORDE: The boke for to Lerne a man to be wyse in building of his howse (1540).

THOMAS TUSSEY: A hundreth good pointes of husbanderie (1557).

THOMAS HILL: The proffitable Arte of Gardening (1563).

THOMAS HILL: The Gardeners Labyrinth: containing a Discourse of the Gardener's life (1577).

JOHN GERARDE: The Nerball, or General Historie of Plantes (1597).

等があり、この時代に既に庭園研究が植物研究に向う傾向が見られるのであつて、このようにして現れた専門家の主張は、實際的な施工及び理論の両面に互つて、「如何にしてかくの如き庭園を造るか」ということを示すにあつた。このような專

20) BIESE, A.: Das Naturgefühl im Wandel der Zeiten. 1926, S. 108.

21) HENNIG, R.: Die Entwicklung des Naturgefühl, 1912, S. 56.

22) 今田敬一: 森林觀照の變遷 造園研究, 第8輯, 41.

23) KAMMER, F.: Studien zur Geschichte des Landschaftsgefühls, Dokt. der Berl. Univ. Mai, 1909, S. 21.

24) WAUGH, F.A., The Natural Style in Landscape

Gardening, P. 19 によれば、自然式 Natural 及び整形式 Formal の二つは嚴密に云えば様式 Style ではなく、大きな庭園の型 Form であると述べ、又これら二つを文學型式に比較して、整形式を詩の型式に自然式を散文の型式に擬えた。又 HUBBARD, H.V., Landscape Design, P. 33 庭園構成の型 Mode を整形式 Formal と非整形式 Informal とに分け、その Mode の中には凡ゆる庭園様式が含括されると述べている。

門家側に於ける型式の墨守は、むしろ専門外の人々の主張する庭園論によつて破られることとなつた。

英吉利に於ける文化面の WÖLFFLIN, H. の所謂基礎的情趣 Grundstimmung は、歐洲に於ける一般的傾向たる文學界に見られる自然に對する感覺の缺除にも拘らず、自然的環境と時代的傾向とに培われて、田園特に庭園に對する趣味は先ず文學に現れた。その口火を切つたものは FRANCIS BACON の Of Gardens であり、²⁵⁾ その主張を美しい言葉の中に強調したのが、JOHN MILTON の Paradise Lost である。GEORGE MASON の言葉をかりれば、BACON は風景式の豫言者であり、MILTON はその先驅者であるが、²⁶⁾ それらは單に主張に止まつて、直ちには造園家の試みるところとはならなかつた。

伊太利文藝復興期の牧歌に胚胎する英國の田園文學は、自然美の憧憬となり、敘情詩となつて

十七世紀後半には ROBERT HERICK, JOHN MILTON が出、十八世紀に入るや JOSEPH ADDISON, ALEXANDER POPE, JAMES THOMSON, JOHN DYER, WILLIAM SHENSTONE, THOMAS GREY, OLIVER GOLDSMITH 等が出て、自然美を歌い田園趣味を詠んだ。SHENSTONE は Unconnected Thoughts on Gardening (1764) を著して、始めて Landscape Gardener の語を用い、庭園美を分けて sublime, beautiful, melancholy or pensive の概念を興えたことは、最も大きな業績である。

このような社會的刺戟の中に、造園家の間にも次第に風景式への憧憬が、その作品にも現れ始めたことを見る事が出来るようになった。GEORGE LONDON and HENRY WISE,²⁷⁾ STEPHEN SWITZER,²⁸⁾ BATTY LANGLEY,²⁹⁾ BRIDGEMAN,³⁰⁾ WILLIAM KENT,³¹⁾ LONCELOT BROWN,³²⁾ HUMPHREY REPTON,³³⁾ 等の造園家を通じて風景式はその主張を大切に育まれていつた。

25) これを我國に紹介したのは、針ヶ谷鐘吉、ベーコンの庭園論、造園研究、第6輯。

26) 針ヶ谷鐘吉：英吉利風景式庭園、造園研究、第9輯、15より引用。

27) 彼らは何れも十七世紀から十八世紀にかけて活躍した造園家で、後に宮廷造園家となつて、ケンシントン庭園の築造、ハムプトンコート改造等をもなし、その設計は未だ整形形式にとらわれていたが、古い型を破るべく幾多の試みがなされた。

28) LONDON, G. 及び WISE, H. を師とした SWITZER はその著 "The Nobleman s, Gentleman s and Gardener s Recreation" (1715) に主張するところを明らかにし、その序につづられた「造園を好む程の者はチューリップの花を愛するよりは、展げた風景を眺めている方がましである。それは調和のとれた植樹や粗野な植栽が行われ、緩かにうねる河、急流、瀑布、さては四方の丘や岬等の隆起をのぞむ風景である。」という言葉に十分にもらわれていると言ふことが出来る。

29) LANGLEY は主として著述によつて貢獻した人の一人であつて、"The new Priciples of Gardening on thh layingout and Planting Parterres" (1728) の中には技術家らしく造園の方針を28ヶ條にまとめたほか、諸種の築造にも諸々の法則を興えた。

30) 宮廷の管理者で LONDON, G. 及び WISE, H. の後継者

である。その主張は専らその作品に求めねばならぬがその代表的なものはストウ園である。所謂 Hahan は特に有名である。

31) WALPOLE の言を借りれば、「不完全な造園論の中から体系を生み出す天才に恵まれた彼は、凡ての自然が庭園であることを見出し、丘と谷とが互に巧みに變化してゆく妙にうたれ、緩やかな起伏の美しさを味得した」畫家であり又建築家でもあつた彼が、BRIDGEMAN の後継者として、詩人 Pope とも相知り、直線を最も嫌つた。彼に到るや風景式の主張を現わした庭園は實に移しい。

32) BROWN は蔬菜園藝家として身を立てたが、後宮庭園藝家となつて以來忽ち有名となり多くの仕事をした。彼には WALPOLE, WHITEHEAD の外、REPTON 等の讚美者があつたが、一方 GILPIN (森林美學者)、PRICE (繪畫評論家) 等はその偏狹の故に厳しく非難した。

33) 彼は英吉利に於ける風景式庭園の大成者であつたばかりでなく、その主張は造園學の方向を示す最も重要なものである。その著には、有名な "Sketches and Hints on Landscape Gardening" 及び "The Theory and Practice of Landscape Gardening" (1803) がある。彼は藝術的目的の爲に實用をつぶすよりも、むしろ實用を藝術的目的の爲に融合せしめることに苦心した。彼は又その著書によつて繪畫派との論争に於けるブラウン派の主張を代表する。

このような経過をだどつて風景式への憧憬は深められたが、庭園の改造にあつて整形形式を風景式に變へるには、多くの反對と厳しい批判があつて、むしろ反つて風景式の内容を豊かにする結果となつた。十七世紀以來行われた庭園詩文にもまして、最も厳しい論争は、繪画評論家 PRICE, U., KNIGHT, R.P., 森林美學者 GILPIN, W., 造園家 REPTON, H., MARSHAL, W. 等によつて行われた Brownists と Picturesque school との誌上論争である。この風景式の主張に對して最も偉大なる功績をなした REPTON, H. の造園論は、造園と繪画との類似を認めたこと、及びそれらの間にある相違點を科學的な精密さを以て明かにしたこと、にその價值が見出される。設計にあつての注意事項として興えた法則並びに實際上の細部にわたる説明には KENT の所謂「自然は直線を嫌う」とらわれることなく、それを建築物及び住様式と調和させるために最も大きな努力のあとが見られる。

移植した樹がよく生育するかということは園藝的に最も重要であるが、むしろその樹がどんな配合の中におかれたかということの方が、どうすれば豊艶な花をつけることが出来るか或は又このような小橋のこの部分の計算式はこうなるというようにことにもまして、むしろすべての技術的なことの間には釣合をもたしめることの方が、より本質的な造園の課題であることが示された。と同時に一方に於けるその強調にも拘らず、凡ゆる技術的なことの器官としての重要性を主張することをも忘れなかつたところに REPTON の偉大さがみとめられることを忘れてはならない。十八世紀英

吉利造園界を概観したことはこの點を明らかにするためであつた。

歴史を下るに従つて、我々の視野は廣められたが、庭園についてもこのことは十分に明かである。公園の發生のみならず、又單に敷地に於ける大きさの擴大をのみいうのではなく、むしろ根本的に庭の見方の變つてきたことにそれを見るのが至當である。庭園趣味が整形的から田園に解放されて自然的傾向を多くとり入れるようになったこと、及び風景美の觀照が田園から更に森林へとその趣味の變遷をとげること、³⁴⁾ そして庭園が廣い意味の一つの風景、或は風景の一駒と見做されるようになってきたことは最も著しいことである³⁵⁾。一方森林美に關しては、又林業關係者の中にその研究主張が徐々に進められていた。元來森林の美的觀照は我國に於いては萬葉の昔から、西歐に於いては希臘、羅馬の時代から行われたことは詩文に見られる。林業關係者の森林美顧慮の歴史及びそれに關係ある森林美學思想の發生は、十八世紀以後のことに屬する。³⁶⁾ HANS KARL VON CARLOWITZ, HENRI LOUIS DUHAMEL DU MOUCEAU, LAURENZ JOHANN DANIEL SUCCOW, JOHANN, JACOB TRUNK, HEINRICH VON COTTA, WILHELM FRIEDRICH VON DER BORCH, GOTTLÖB KÖNIG, HEINRICH CHRISTIAN BURCKHARDT, LEOPOLD DENGLER, CARL EDUARD NEY 等を経て VON SALISCH にいたつて、始めて林學に於ける獨立した分野としての森林美學の建設が試みられた。³⁷⁾ これらは單に森林の美に關心をよせた林學者の名をあげたにすぎないが、植物學者或は他の藝術家の森林觀照が、林學者の主

34) 今田敬一：森林觀照の變遷。造園研究，第8輯，44-45によれば、「自然に歸つた英吉利の影響は全世界に波及し、獨逸は十八世紀最初の四分の一の間に影響を受け、十八世紀後半に於て最早や動かし得ぬ勢力となつた。唯庭園に自然をとり入れたのみならず、人々は自由の自然に感激を覚え、森林もその自由な自然な姿を以て人々に迫つた。BERNOULLI は嘗て美しいと考えられなかつた Schwarz Wald の自然そのままの原始の姿に心惹かれた。之は 1760 年のことで、近代の原生林愛好が既にこの頃に始つてゐるのを知る。」

35) REPTON は住居附近では繪畫的效果よりは便利を重んじ、テレースその他の建築的方法を用いても、離れるに従つて漸次自然風景にとけこむようにつとめた。ここに庭園をその周囲の自然と共に見ることの主張が見られる。我國の借景的庭園の狙いもここにその理論的出發がある。

36) 今田敬一：森林經營に於ける美的顧慮の歴史。林學會雜誌，34；30-46, 1926.

37) 今田敬一：森林美學の基本的問題の歴史と批判。北大演習林報告，9；1-246.

張に影響を與えたであろうことは、十分に考えられる。³⁸⁾ 森林經營に於ける美的願慮は天然保護運動に關連する一方、國有林たとと民有林たととを問はず重要な問題であつて、森林の經濟的側面と對立し、又廣い意味での風景問題と同調して、廣義に於ける造園學と相提携することとなつた。³⁹⁾

造園學の興味は、更に建築と都市計畫とに密接なつながりをもっている。建物の實用及び美と庭園との關係に於ける美的願慮は、造庭家の最も注意するところであつて、勿論その歴史は極めて古いけれども、建築の集團美或は都市としての美が、その全體的構造に於いて造園家の注目するところとなつたのは、さして古いことではないと言はれている。尤も都市を美しくしようとする意欲は、都市の發生と同様に古い歴史をもっていることは否めない。職業の分化が未だすすんでいない時代に於て、都市美を考えた者が、凡ゆる分野の部面にわたつて多くあることも又十分に容易になづかれる。唐の都制を眞似たといわれる我國の平城、平安兩京の都市形態は、世界に誇り得るものであるが、近世に入り城下町の發達を見、經濟的小都市がおこり、地域の指定、建築物に對する統制等を行うにいたつてからの、これら都市群落に於ける對策は殆んどすべてが造園的興味以外に出發し、その實施にあつても、實際上の必要に迫られてなされ造園的關心の現れは全く稀薄である。道路に樹を植えることが、都市美に於ける造園的興味のあらわれであるという主張によれば、庭園の築造も又都市美への興味的一端であることを否めない。庭園を造築し、植樹すること自體に都市に於ける造園的興味を見出すよりも、その庭園の社會的意義或は價值を意識し、都市美の一駒として眺められる美として意識せられ始めるところに、造園の都市美への加入が發生したことを見、これが具體的な形となることにその發育を見ることが妥當であると考え。

都市の美への造園の加入が意識され、意欲されたことは、路傍樹の植栽、公園の發生、私庭園

に於ける籬、前庭の手法等に見出すことが出来る。理解に便する爲に例を我國にとれば、松平定信の庭園への意圖をあげることが出来る。⁴⁰⁾ 「山水のたかきびきも隔てなく共に楽しみ園居すらしも」⁴¹⁾ という和歌は、寸言よくその旨を語つている。その意欲を盛つた南湖園が、境界の限界性に乏しく、藝術的意圖を表現するに必要な獨立性に稀薄であるために、嚴密な意味で庭園ということが出来ないという主張があるにも拘らず、⁴²⁾ 「むつかしきは風流うすきものにこそ」という翁の言葉は南湖園の遺構と共に、よくその意欲を物語る。

現今建築及び都市形態には、機能の科學的な合理性が重んじられるようになり、衛生學的な根據から、或は厚生的な理由から、建物と建物の間には綠地が必要なこと、人口何人について如何程の公園を要するか等が考えられ、都市の發達と共に、益々この厚生的要求は切實となり、綠化の必要は都市計畫家のひとしく強調するところとなつて、厚生的要求と造園的興味とは愈々益々同調することとなつた。然し乍ら造園學的課題の眞髓はここに於てもこの必要を示すことにとまらず、その必要を如何に處するかを考究するにあることは言うまでもない。

IV 結 言

造園學の研究がその必要とこれに對する興味とに依つて、近來大いに進興し、その獨立性をそなへつつあることは事實であるが、科學研究としてその進歩は極めておけていることは否定出来ない。筆者は上述するところによつて、次の如き問題の斯學發達に對する重要性を説いた。

造園理論に關する研究は最も困難を豫想せられるとはいへ、現代の學者に與えられた最も重大な問題であるに相違ない。それが歴史的に論考されると、現在に於ける設計について論考されるとに拘らず、この課題が造園學の主要目的であつて、他はそれに至る段階としての役目をもたされるものである。これが爲には、現在までに得られた幾

38) これについては本稿の記事に畧述した。

39) 今田敬一；森林美學と造園學との差別、林學會雜誌、14；9、738。

40) その傳記は、淺澤榮一、樂翁公傳に詳細である。

41) この和歌は南湖園共樂亭を詠じたもの。

42) 菅野義胤：南湖園に就いて、造園雜誌、11；9、1948。

多貴重な研究をもとにし、實地に作品を踏査し、自然感情發達の跡を検し、更に廣く美術文學に關する特殊事情をも考慮しなければならぬ。

西歐の造園術を受入れることは、實際に最も興味あるところであつて、多くの努力がそれに向けられたことは實に當然のことといわねばならぬ。然し乍ら造園學の研究には、更に廣くそれらに體系を興へ精密にその理論を求めべきを主張することも又十分に顧みらるべき價值がある。

その理論の研究はどのような方法によるべきかということは又最も大切なことに屬する。本質的に造園美に關する理論を追及すれば、自然科学的方法の上に文化科學的方法⁴³⁾が用いられなければならぬ。即ち文化財としての造園を對稱とする研究は「對象に價値の別なく凡てを普遍的な概念法則の一實例として見る自然科学的方法と、價値に關係せしめて對象を見る文化科學の方法」⁴⁴⁾とに依る認識を必要とするに至る。作庭にあつて最終の決定權をもつものに關する研究は美學に於ける方法によらねばならぬ。蓋し造園は美的事實たると同時に文化要素としての意義と歴史とを有するから、歴史學、社會學及び心理學の見地と方法とによつて研究せらるべき部分と同時に、哲學の立場によつて解釋せらるべき部分を含んでいることは明かである。造園の本質並びに條件を考じその美意識の問題を考ずることも又重要な課題である。

植物その他の材料、施工、管理行政等に關する實際的事項、風景構造に關する基礎的研究の重要性等は又文化財としての造園の特殊性に由來する。建築に於ける之らとはやや異つた意味に於いて造園の構成に與るものであることを記して、之に關する詳細は別の機會に述べることにする。

著者はこのような結論の生ずる經過を最もよく説明し得るものとして、REPTON の造園論が導かれる迄の英吉利に於ける庭園に對する要求の變遷を概観した。そこには園藝學と造園學との分化初期に於ける關係及び文學、美術、社會思潮との

關係が明かにされ得るからである。併せて林學その他の關係をも記して、現在に於ける造園學の課題及びそれに必要な方法を明かにした。

以上造園の科學としての發達の爲にどのような問題が重要であるかについて記述し、併せてその方法についても僅かに論及したが、これによつて造園學が園藝、林業、建築及び土木等の中に、その美的意味契機によつて分化し發達しつつあることを説明した。

参 考 文 獻

- BAILEY, L.H.: New Cyclopaedia of American Horticulture 1906.
- BESE, A.: Das Naturgefühl im Wandel Der Zeiten 1926.
- 針ヶ谷鐘吉: 英吉利風景式庭園. 造園研究, 第9輯, 1933.
- 針ヶ谷鐘吉: ベーコンの庭園論. 第6輯, 1932.
- HENNIG, R.: Die Entwicklung des Naturgefühls 1912.
- HUBBARD H.V. & KIMBALL, T.: An Introduction to the Study of Landscape Design 1924.
- KAMMER, F.: Studien zur Geschichte des Landschaftsgefühls. Dokt. der Berl. Univ. Mai 1909.
- 菅野 義胤: 南湖園に就いて. 造園雜誌, 11, 7-10, 1948.
- 今田 敬一: 森林經營に於ける美的顧慮の歴史. 林學會雜誌, 34, 30-62, 1926.
- 今田 敬一: 森林美學の本質に就いて. 林學會雜誌, 10, 661-682, 1928.
- 今田 敬一: 森林美學と造園學との差別. 林學會雜誌, 14, 730-738, 1932.
- 今田 敬一: 森林美學の基本的問題の歴史と批判. 北大演習林報告, 9, 1-246.
- 今田 敬一: 森林觀照の變遷. 造園研究, 第7, 8輯, 1933.
- 西山 卯三: 建築學ノート. 1948.
- 丹羽 鼎三: 庭園の本質. 造園雜誌, 11, 21-26, 1948.
- 岡崎 文彬: 歐米に於ける高等造園教育. 造園研究, 第20輯, 1936.
- 濂澤 榮一: 樂翁公傳. 1937.
- REPTON, H.: The Art of Landscape Gardening, (Nolen, J.), 1907.
- 田村 剛: 造園學概論. 1925.
- 田村 剛: 我國に於ける造園學の發祥. 造園研究, 第4輯, 1932.
- 田邊 元: 科學概論. 1921.
- TRIGGS, H.I.: Carden Carft in Europe 1913.
- 内田桂一郎: ハーバード大學に於ける造園教育. 造園研究, 第15輯, 1935.
- 上原 敬二: 造園學汎論.
- WAUGH, F.A.: Natural Style in Landscape Gardening 1917.
- WAUGH, F.A.: Landscape Gardening 1922.

43) HEINRICH RICKERT は WUNDERBANDT の歴史學の思想を成就して文化科學を樹立し、自然科学と對立させて、自然科学と對立した精神科學に代えた。

Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft 1915 邦譯佐竹哲雄氏譯本もあり。

44) 田邊 元: 科學概論. 202, 1921.